研究ノート

ビブリオバトルの現状と問題点
- 知的書評合戦について -

Current Status and Problems on Bibliobattle

林　伸一

１．ビブリオバトルとは何か

ビブリオバトルという語からの印象としては、欧米から来た概念かと思われがちであるが、そういった予想を裏切り、日本発の概念であり、日本での造語と言える。『ウィキペディア（Wikipedia）』によると「ビブリオバトル（Bibliobattle）は、京都大学から広まった輪読会・読書会、または勉強会の形式で『知的書評合戦』とも呼ばれている」。つまり、ビブリオバトルという言葉は、日本で作られた外来語（和製外来語）であり、「知的書評合戦」という訳語が、補足的に説明的に付与されている。

そもそも「ビブリオ」は書物などを意味するラテン語由来の言葉で、「ビブリオバトル」とは、立命館大学情報理工学部の谷口忠大教授が命名した。ゲーム的要素を取り入れた新しいスタイルの「書評合戦」で「知的書評合戦」とも言われている。ビブリオバトラー（発表者）たちがおすすめ本を持って参加し、1 人 5 分の持ち時間で書評した後、バトラーと観客が一番読みたくなった本「チャンプ本」を決定する。（http://zenkoku.bibliobattle.jp/bibliobattle 参照）

２．ビブリオバトルの歴史

2007 年に京都大学情報学研究科共生システム論研究室の谷口忠大氏によって考案され、2008 年に同氏が立命館大学助教となると、研究室の有志によって運営が続けられた。その後、京都大学の総合人間学部や大阪大学など各地に広がっていった。共生システム論研究室では開始当初より YouTube を用いた各発表の公開が行われている。

その後、2010 年にビブリオバトル普及委員会が発足。同年より、大学生・大学院生を対象にした「ビブリオバトル首都決戦」が開催されている。（http://www.bibliobattle.jp/参照）

つまり、2007 年に京都で生まれたビブリオバトルは、2017 年ですでに 10 周年を迎えている。

また、2010 年に生まれ、普及活動の中核を担ってきた、ビブリオバトル普及委員会は、その運営母体として新たに「ビブリオバトル協会」を設立し、更なる飛躍を目指している。

ビブリオバトルの普及状況や伝わり方、文化など、実際には地方によって様々なのが実情である。

インターネットの時代ではあるが、発案者の谷口忠大氏（2017 年 4 月より立命館大学情報理工学部 教授）が「直接行って語り合うことこそ重要」との趣旨で、2017 年に全都道府県を回る「谷口忠大のビブリオバトル全国行脚」を計画し、実施した。

その全国行脚で、発案者が直接行って、ビブリオバトルの面白さ、ポイントを伝え、ビブリオバトルの輪を広げようというもので、2018 年には各地でビブリオバトルが開催されるようになった。

谷口忠大氏は「インターネットの時代にあっても、生身の身体で、その場に集まって行うコミュニケーションには大きな価値がある」と主張している。（www.bibliobattle.jp/whatsnew/biburiobatoru 参照）

３．ビブリオバトルの公式ルールと開催情報

ビブリオバトル普及委員会によって、次の４項目の公式ルールが定められている。

> 1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
> 2. 順番に一人５分間で本を紹介する。
> 3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを 2～3 分行う。
> 4. 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか?」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。
>
> － ビブリオバトル普及委員会「ビブリオバトル公式ルール」より

「たったこれだけのルールで、実施すれば読書がスポーツに変わる！本を読むのが楽しくなる！いろんな本に巡り会えて、どんどん世界が広がる！」とされている。

また、紹介の際に準備するものは、シンプルに本とカウントダウンタイマーだけで良い。あとは、ライブでアドリブで本について語る。参加者に配布するレジュメは準備せず、パワーポイントなども利用せず、生の語りで紹介することが良いとされている。

身近にいる友人や同僚や仲間達と一緒にビブリオバトルを企画し、開催することが呼びかけられている。（http://www.bibliobattle.jp/参照）

バトラーがメモも見ないで話すことが求められるのは、バトラーのプレゼンテーション能力を競うのではなく、あくまで本を媒介にした生の（face to face）コミュニケーション能力を重視しているためであろう。若者の読書離れが問題になっているが、その改善策の一つとして期待されていると言える。

表１．ビブリオバトルの開催情報

開催年	本戦決勝日	本戦決勝会場	チャンプ本	予選参加者数
ビブリオバトル首都決戦 2010～2013（2010 年 － 2013 年）				
2010 年	11 月 3 日	東京国際フォーラム	アーヴィング・ゴッフマン『スティグマの社会学』	53 人
2011 年	10 月 30 日	ベルサール秋葉原	西澤保彦『彼女はもういない』	182 人
2012 年	10 月 21 日	ベルサール秋葉原	九鬼周造／藤田正勝『「いき」の構造』	524 人
2013 年	11 月 24 日	ベルサール秋葉原	大鐘良一／小原健右『ドキュメント 宇宙飛行士選抜試験』	783 人
全国大学ビブリオバトル 2014～京都決戦～				
2014 年	12 月 14 日	京都大学百周年時計台記念館	ロビン・スローン著／島村浩子訳『ペナンブラ氏の 24 時間書店』	874 人

全国大学ビブリオバトル 2015～首都決戦～				
2015 年	12 月 23 日	よみうり大手町ホール	野田秀樹著『僕が 20 世紀と暮していた頃』	914 人
全国大学ビブリオバトル 2016～京都決戦～				
2016 年	12 月 18 日	京都大学百周年時計台記念館	内田百閒著『冥途』	1,207 人
全国大学ビブリオバトル 2017～首都決戦～				
2017 年	12 月 17 日	よみうり大手町ホール	二宮敦人著『18 禁日記』	1,160 人

(http://www.bibliobattle.jp/より引用)

上記の表 1 に示されたのは、大学関係のビブリオバトルの開催事例であるが、年々回を重ねるごとに予選参加者数が増加している。2010 年 53 人と二桁だった参加者が、翌 2011 年には、三桁となり、2016 年からは四桁とほぼ右肩上がりに上昇している。大学以外のビブリオバトルの開催事例もあるであろうが、残念ながら、まとまった報告が見当たらない。

４．ビブリオバトルの入門書

学校や図書館でビブリオバトルを企画し、開催するためには、様々な入門書や実践集が出されている。出版年順にリストしてみると次のようになる。

谷口忠大（2013)『ビブリオバトル- 本を知り人を知る書評ゲーム-』文藝春秋(文春新書 901)

吉野英知・須藤秀紹・大谷裕・谷口忠大 監修・ビブリオバトル普及委員会 編著（2013)『ビブリオバトル入門 ～本を通して人を知る・人を通して本を知る～』情報科学技術協会

谷口忠大監修・粕谷亮美著・しもつきみずほ イラスト(2014) 『ビブリオバトルを楽しもう ゲームで広がる読書の輪』さ・え・ら書房

ビブリオバトル普及委員会 編(2015) 『ビブリオバトル　ハンドブック』子どもの未来社

谷口忠大監修（2016）『コミュニケーションナビ 話す・聞く① やるぜ！ビブリオバトル』鈴木出版

谷口忠大 マンガ原案・監修・沢根千尋 マンガ・粕谷亮美 文（2016）『マンガでわかる ビブリオバトルに挑戦！』さ・え・ら書房

須藤秀紹・粕谷亮美編（2016）『読書とコミュニケーションビブリオバトル実践集』子どもの未来社

木下通子（2017）『読みたい心に火をつけろ！』岩波書店

読みたい心に火をつける！実行委員会編（2017）『学校司書のいる図書館に、いま、期待すること』日本図書館協会

濱野京子作・森川泉絵（2017）『ビブリオバトルへ、ようこそ！』あかね書房

谷口（2013)の『ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム』を皮切りに毎年、ビブリオバトルの入門書・ハンドブック・実践集などが発行されている。ビブリオバトルへの関心の高さが示された形となっている。濱野京子作『ビブリオバトルへ、ようこそ！』は、ストーリー仕立てになっている。

５．ビブリオバトルの山口県での開催事例

2018 年 9 月 26 日付「朝日新聞」（山口版）は、「読書の秋　魅力を分かち合おう」という見出しで、山口県内のビブリオバトルを紹介している。記事によると、県内の愛読家たちは、「山口はビブリオバトルの先進県」と口をそろえるとある。それは、山陽小野田市、宇部市、萩市、周南市、山口市、防府市などの図書館を中心に、県内で毎月のようにビブリオバトルが開催されているからであろう。

NPO 法人「読書普及協会」チーム山口の倉迫一男さん(55) は、県内５会場でビブリオバトルの運営を担っているとのことである。同氏は、人前で話すのは苦手だったが、5 年前に体験してはまり、「ステージに立って思いを語り、拍手をもらう開放感と快感を多くの人に体験してほしい」と語っている。

2018 年 9 月 26 日付「朝日新聞」は、県内の主なビブリオバトルを以下のように紹介している。

9 月 29 日午後２時　山口理科大学図書館(0836-88-4512) 10 月 28 日午後２時　「チャンプ本　県大会」萩市立図書館(0838-25-6355) 参加無料。申し込みは各図書館へ。チャンプ本県大会は、県内のビブリオバトルで勝ち抜いた人のみ参加できる。最新の開催情報はツイッターアカウント「アイある読書会」

そのほかにも、次のようなビブリオバトルが山口県内で開催されている。

◎10 月 14 日(日) 13：30～14：30　「ビブリオバトル in 秋穂」秋穂地域交流センター（図書館と友達の会・秋穂、山口市立中央図書館友の会「トネリコ」主催）発表者 7 人　観覧者 7 人　チャンプ本『「罪と罰」を読まない』岸本佐和子著（文藝春秋）　「秋穂図書館だより」2018 年 12 月号参照

◎10 月 28 日(日) 13:00～14:00 「市民参加型ビブリオバトル」山口市中心商店街どうもん広場（やまぐちブックストリート実行委員会主催）発表者 4 人　観戦者約 15 人　チャンプ本『星守る犬』村上たか

し著（双葉社）　会場の広場では、山口市立中央図書館の移動図書館「ぶっくん」が本の貸し出しをしていた。

◎11 月 12 日(月) 13：30～15：00「知的書評合戦　防府図書館　ビブリオバトル　平成 30 年度第 3 回」防府図書館ブラウジングコーナー　テーマ『旅』発表者 5 人　観覧者約 25 人　チャンプ本『もの喰う人びと』辺見庸著（角川文庫）　「ほうふ図書館だより」2018 年 12 月(No.360)参照

◎11 月 25 日(日) 13：30～14：30　「第 6 回　知的書評合戦　ビブリオバトル in 小郡」小郡図書館（小郡図書館友の会鉢の子主催）発表者 5 人　観覧者 14 人　チャンプ本は同数票で三冊であった。

◎12 月 15 日(土) 15：00～16：00「知的書評合戦　クリスマス ビブリオバトル in 山口図書館（山口県立山口図書館主催　発表者 4 人　観覧者 14 人　チャンプ本は同数票で次の三冊であった。

『亡命ロシア料理』（P.ワイリ 著、未知谷、2014.11）
『STAR EGG 星の玉子さま』（森 博嗣 作・画、文藝春秋、2007.12）
『もしも、ぼくがサンタクロースとともだちだったら・・・』(富安 陽子 さく、くもん出版、2009.11)
（http://library.pref.yamaguchi.lg.jp/node/1982 参照）

上記の 2018 年 12 月 15 日(土) 15：00～16：00「知的書評合戦　クリスマス ビブリオバトル in 山口図書館」（山口県立山口図書館主催）の事例を参与的観察者として検討しておきたい。趣旨や呼びかけは、以下の通りであるが、募集定員としては、5 人であったものが実際には 4 人しか集まらず、参加者も 30 名には至らず、14 人であった。開催時期やテーマの設定に問題があったのではないかと思われる。

「12 月、山口市はクリスマス市になる」事業（山口市商工会議所主催）の協賛行事として、2018 年 12 月 15 日（土）15 時から 16 時まで、クリスマスビブリオバトルが山口県立山口図書館で開催された。その呼び掛け文は、「クリスマスを祝う風景にはおいしい食べ物が欠かせません。絵本や物語であこがれを抱いた方も多いことでしょう」と書かれている。そこで、ビブリオバトルのテーマは、「クリスマスに読みたいおいしい本」と設定され、「発表者には、絵本、小説、料理本などから本を紹介していただきます」とされた。その一方で、「絵本、小説、エッセー、料理本、旅行本などジャンルは問いません。読後の感動をみなさんと共有してみませんか」と範囲が拡大された形でも示された。ただし、「クリスマスに読みたい本」ならば、バトラーとして応募しても良いのだが、「おいしい本」と付くと「料理本」か「ケーキなどのお菓子の本」を連想してしまい、応募をためらってしまうとの声も聴かれた。あまりテーマを限定しすぎると狭い範囲の参加者に限られてしまう。防府図書館のビブリオバトルのようにテーマを「旅」とするなどシンプルに設定したほうが応募しやすいと思われる。

12 月 15 日のビブリオバトルは、共催団体として、山口大学図書館や山口県立大学図書館が加わったこともあり、外国人留学生がバトラーとして参加した点も評価されても良いであろう。

なお、当日は、参加無料で、１７時から「図書館ナイトツアー」も実施され、合唱や閉館後の夜の図書館見学（閉架書庫内の見学を含む）が行われ、参加者は有意義な体験をすることができた。

ツイッターアカウント「アイある読書会」で検索してみると次のような2019年のビブリオバトルの開催予定が表示されている。「アイある読書会」は、極めて積極的にビブリオバトルを展開している。

2019年　アイある読書会　開催予定　#bibliobattle　#ビブリオバトル　５年目に入ります。

14：00～16：00

２月３日（日）中央図書館	３月３日（日）宇部市図書館	４月14日（日）厚狭図書館
５月12日（日）中央図書館	５月26日（日）萩市図書館	７月７日（日）厚狭図書館

2019年もスタンプラリーします。#bibliobattle　#ビブリオバトル　バトラー、観戦どちらでもOKです。
（先着順30名様）　３会場　記念品　６会場　図書カード　1000円分
10会場　図書カード　3000円分　　詳しくは　会場で。

上記の「中央図書館」という表示は、山陽小野田市立中央図書館（山本安彦館長）のことで、厚狭図書館はその分館にあたる。山口市立中央図書館も「中央図書館」ということがあるので、混同しないように正式表示をしたほうが良いと思われる。

６．ビブリオバトルの意義と問題点

６－１．ビブリオバトルの意義

１）若者の活字離れが問題視されてから久しいが、近年はパソコンやスマホなどが普及して増々読書離れが深刻化している。本を読むよりもスマホでゲームするほうが楽しいとスマホ中毒になっている若者が多い。そこへビブリオバトルというゲームの要素を取り入れた書評合戦を考案し、拡散させた意義は大きい。

書評するためには、まず本を読み込まなければならないし、漫然と読むのではなくテーマを考えながら読む必要がある。これまで一人で読むという孤独な作業であったものが、バトラーが集まって発表し、ディスカッションするという出会いとコミュニケーションの機会となる。

読書という行為を静的なイメージから動的なイメージに転換できる。時間と場所と参加人数と内容を構成して、グループで実施するという点では、構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter：SGE注１）のエクササイズの一つとしても位置付けることができるであろう。

それは、谷口（2013）『ビブリオバトル- 本を知り人を知る書評ゲーム-』やビブリオバトル普及委員会（2013）『ビブリオバトル入門 ～本を通して人を知る・人を通して本を知る～』の副題にあるように、「本を通して人を知る」機会となれば、SGEの自己開示・他者理解に通じるからである。あくまで「本を通して人を知る」の「人」は「本の著者」という意味ではなく、「本の紹介者」つまりバトラー（発表者）の意味である。

２）人前で話をすることが苦手な人、限られた時間内で要領よく話ができない人にとって、ビブリオバトルのバトラーとなって対戦することは、社会的なコミュニケーション能力を訓練するいい機会となる。その意味で、ソーシャル・スキル・トレーニング（Social Skill Training:SST社会生活技能訓練）の一つとしても位置付けられる。SSTは、社会的なコミュニケーション上の障害を持った人ばかりでなく、日々多くの時間をコンピューターと対面して生活しているような現代人にとっても必要な訓練となりつつある。メールでならば、他者と必要なコミュニケーションをとることができ

るが、いざ面と向かって生の（face to face)コミュニケーションは苦手という現代人は少なくない。

あくまで本を媒介として本に書かれている内容を伝えたいという動機での伝達（Contents Based Communication)が訓練される。

逆に、紹介する本にまつわるエピソードや周辺情報のおしゃべりに終始するようなバトラーがいるが、もともと輪読会・読書会を起源とするビブリオバトルは、発表５分のうち１～2 分程度を本の一部を朗読するような人がいても良いと思われる。やまぐちカルチャーセンターで「街の朗読屋さん」という講座を担当し、対外的には「山口の朗読屋さん」というボランティア活動をしている身としては、ビブリオバトルも朗読の一つの発表の機会として位置付けたい気持ちがある。

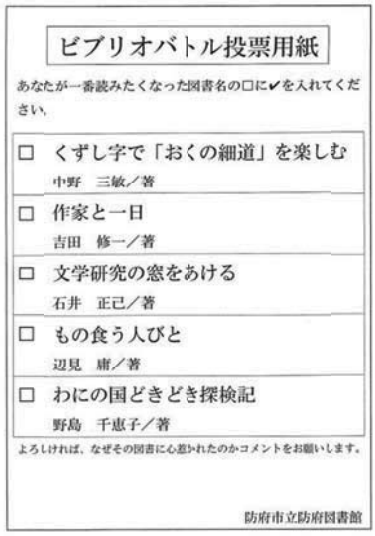
いづれにしても、恥ずかしさを粉砕するプログラム、羞恥心克服法（Shame-attacking exercises 注２)として取り組む価値があると思われる。

谷口(2013)も、ビブリオバトルを紹介するとき「コミュニケーションの場作りの手法」としているとのことである。

３）人前での話が苦にならない人にとっても、説得力やプレゼンテーション能力を鍛える機会となる。新商品のプレゼンなどでは、新製品そのものや配布資料、パワーポイントで制作された映像の力を借りてプレゼンテーションが行われることが多い。ビブリオバトルでは、紹介する本以外に、メモや配布物、パワーポイントを用いないで話さなければならない。補助手段を用いず、本だけで内容を語るのは、説得力やプレゼンテーション能力を鍛える良いチャンスとなる。参加者からの質問に適切に回答できたか、的外れの応答になっていなかったかなど、チャンプ本に選ばれるか否かで、参加者からのフィードバックが得られることとなる。もちろん、バトラーが評価されるのではなく、本が評価されるという建前になっているが、いくら優れた本であってもバトラー（紹介者）が説得力を持って、的確に、熱心に参加者に訴えられなければ、チャンプ本には選ばれないであろう。

６－２．ビブリオバトルの問題点と改善点

１）バトラーの応援団が多ければ多いほど、チャンプ本を選ぶ際に組織票が多く入り、応援団がいなければ、チャンプ本に選ばれる可能性が低くなるという問題がある。あるバトラーの応援団として参加していても、別のバトラーの紹介した本が良いと思ったら、そちらに投票できるような工夫が必要である。手を挙げて決めるのは、主催者の手間を省けるが、応援しているバトラーとは別のバトラーには手を上げにくく、もし、そうした場合には、応援団から裏切り者扱いされてしまうこととなる。手間がかかっても無記名の紙での投票が望ましい。右の防府市立図書館の例ように、あらかじめ発表者の募集の際に書名と著者名を連絡するようにしておけば、当日に書名と著者名が入った投票用紙が配布できる。


ビブリオバトル投票用紙

あなたが一番読みたくなった図書名の□に✔を入れてください。

□ くずし字で「おくの細道」を楽しむ
中野　三敏／著

□ 作家と一日
吉田　修一／著

□ 文学研究の窓をあける
石井　正己／著

□ もの食う人びと
辺見　庸／著

□ わにの国どきどき探検記
野島　千恵子／著

よろしければ、なぜその図書に心惹かれたのかコメントをお願いします。

防府市立防府図書館

さらに参加者が少ない場合には、一人で二冊の本に投票できるようにすると前述の小郡図書館や山口県立山口図書館のように票が分かれて、同数票で三冊のチャンプ本が選ばれるようなことも防げるのではないかと思われる。

谷口(2013)は、公式ルールの補足として「紳士協定として、自分の紹介した本には投票せず、紹介者も他の発表者の本に投票する」と定めている。防府市立図書館のビブリオバトルでは紹介者(バトラー）には、投票権が与えられず、不満に思ったバトラーがいたことから、改善が望まれる。

2）バトラーが集まって発表し、ディスカッションするという出会いとコミュニケーションを重視するなら、発表5分に対して、ディスカッションを2〜3分は短いので、5〜10分ぐらいたっぷりととるようにしたい。主催者としては、もし何も質問がでないバトラーがいたら、がっかりするのではないかと考えるかもしれないが、質問する力をつけるのも社会的なコミュニケーション能力を訓練することにつながる。

公式ルールに加えて、チャンプ本が決まったあとのフォローとして「本を通して人を知る」ためにバトラーとバトラー、バトラーと参加者、参加者と参加者の間のシェアリング（分かち合い）の時間を設定するなどの工夫が必要であろう。もちろん、意図的にシェアリングの時間を設定しなくても、自然な流れとしてシェアリングに移行していく光景も見られる。「しかけシンプル、自然なシェアリング」（林1999）が望ましいと思われる。終了後、参加者同士の懇親会をするのもよい。

具体的には、5人のバトラーが発表5分で、ディスカッションを5分ずつしたとしても、50分程度で、開票結果を待つ間の10分程度のシェアリングの時間を設けても、全体で1時間くらいしかかからないであろう。そもそもチャンプ本を決めることが最終的な目的ではないはずである。

3）屋外で実施する場合には、音質の良いマイクとスピーカーの音響設備を準備する必要がある。というのは、屋外では発表者の声が拡散してしまい、観戦者に届かないことがあるからである。

2018年10月28日(日)に山口市中心商店街どうもん広場で行なわれた「市民参加型ビブリオバトル」は、発表の途中にハロウィーンのパレードがすぐ横を通り、音楽や拡声器による大音量のため発表がしばらく中断されたという事態が発生した。幸い発表者も観戦者もその場にとどまったためチャンプ本を選ぶことはできたが、もし参加者が途中で欠けた場合には、本来のバトルが成立しないこととなる。

小郡図書館では、図書館前の木の下で子供向けのビブリオバトルが開かれたこともあるとのことであるが、図書館の隣には、小郡総合支所、その隣には地域交流センターがあり、車や人の往来が多い。やはり、屋外では発表者も観戦者も周りの雑音に影響されて、内容に集中しにくいのではないかと思われる。そのほかにも開催自体が、天候に左右されるという問題点もある。

7．今後の課題

京都大学から広まった輪読会・読書会、または勉強会の形で始まったビブリオバトルを紹介しながら実施方法などについて検討してきたが、勝ち負けのイメージを伴うビブリオバトルに抵抗感を持つ人も少なくない。そういった抵抗感がある場合には、「朗読マラソン」や「ブックトーク」の方式もある。今後、ビブリオバトルと「朗読マラソン」や「ブックトーク」との異同についても検討していきたい。

大学生を中心に始まったビブリオバトルであるが、今や一般の社会人や主婦層にも広がりを見せている。今後は、さらにアクティブ・シニア層（65歳以上で趣味やさまざまな活動、消費に意欲的な、元気な高齢者層）も参加しやすい環境づくり、条件づくりが求められるであろう。例えば「健康の秘訣」「長寿」などのテーマを設定するとか、「敬老の日」に開催するなどの工夫が考えられる。

また、外国人留学生だけでなく、日本に滞在する外国籍の人々も参加しやすいように「異文化理解」をテーマに設定するなどの工夫も必要であろう。草の根レベルでの国際交流の場としてもビブリオバトルを位置付けて、実施しても良いであろう。

注１)構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter：SGE)は、「希薄になった人間関係を回復し、新たな人間関係を育てるカウンセリングの有効な方法論である」。林伸一（2001）「構成的グループエンカウンター・シンプルエクササイズのすすめ」國分康孝監修『エンカウンターで学級が変わる・ショートエクササイズ集 Part2』図書文化 p.3 参照。

注２)羞恥心克服法（Shame-attacking exercises)は、論理療法の介入課題のひとつ。「他人に笑われるようなことをしてはいけない」「恥をかくようなことはことをしてはいけない」という思い込み（ビリーフ）を課題の実行により克服する手法である。（長谷川啓三 1990 國分康孝編『カウンセリング辞典』誠信書房 pp. 263-264 参照）

【参考文献】

林伸一（1999）「シェアリングのしかた」「実施にあたっての留意点」國分康孝監修『エンカウンターで学級が変わる・ショートエクササイズ集』図書文化 pp. 20-25

谷口忠大（2013)『ビブリオバトル- 本を知り人を知る書評ゲーム-』文藝春秋(文春新書 901)